お茶壺道中について

わらべ歌「ずいずいずっころばし」に“茶壺に追われてトッピンシャン　抜けたらドンドコしょ”とうたわれた「お茶壺道中」は、寛永9(1632)年に制度化されたといわれ、江戸時代を通じて将軍や幕府御用の宇治茶運搬のため江戸と宇治を往復した行列です。

幕府の諸役人による行列は、空の茶壺をもって毎年4・5月ごろ江戸を出発し、東海道を宇治へ向かいました。宇治では、宇治の茶師を取りまとめる御茶頭取である上林峯順（六郎）家と上林竹庵（又兵衛）家をはじめ由緒ある御茶師たちが宇治橋東詰で出迎え、御茶壺に石臼で挽く前のお茶の葉（碾茶）を詰めました。封印された御茶壺は、中山道から甲州街道を通り甲州谷村（現山梨県都留市）へ向かい、ここで秋まで保管されましたが、元禄3(1690)年以降は、東海道を通って直接江戸へ運搬されるようになりました。お茶壺道中は、慶應3(1867)年まで続けられました。

国立国会図書館蔵

「お茶の京都博」開催のごあんない

来る2017年4月から約1年間、京都府において「お茶の京都博」を開催いたします。

京都府では、府南部の宇治茶のふるさと12市町村（宇治市・城陽市・八幡市・京田辺市・木津川市・久御山町・井手町・宇治田原町・笠置町・和束町・精華町・南山城村）を舞台とした地域おこしの取り組み「お茶の京都」を推進し、宇治茶をテーマにお茶生産の美しい景観維持やお茶産業の振興、お茶文化の発信などを進めてまいりました。

2017年は、そのターゲットイヤーとして、広く国内外の方々に「お茶の京都」を訪れていただき、本物の宇治茶に出会っていただくために、年間を通じて多彩なプログラムを展開してまいります。

日本文化を語る上で欠くことのできない「茶道」「茶の湯」の発展を、その萌芽期から、茶葉の品質向上や生産拡大の面で支え、日本茶を代表する「抹茶」「煎茶」「玉露」を生みだした、まさに「日本茶のふるさと」と呼ぶにふさわしい地域。ぜひ、この機会にお越しいただき、見て、歩いて、味わうだけでなく、茶摘みや茶揉みの体験、地域の方々との交流などを通じ、日本茶800年の歴史を担ってきた宇治茶の、味と文化の真髄を、一人でも多くの方にご体験いただければと願っております。